



TITLE:

駿豆相交界地方の[聚]落に對する歴史地理的考察(豫報)(二)

AUTHOR(S):

耕崎, 正男

CITATION:

耕崎, 正男. 駿豆相交界地方の[聚]落に對する歴史地理的考察(豫報)(二). 地球 1932, 17(5): 353-368

ISSUE DATE:

1932-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184038>

RIGHT:

地方 石器	信 濃	北 關 東	南 關 東
磨 製 石 斧	$\phi^2 = 0.3070$ $C = 0.48^\circ$	$\phi^2 = 0.5126$ $C = 0.58$	$\phi^2 = 0.5324$ $C = 0.59$
打 製 石 鏃	$\phi^2 = 0.0449$ $C = 0.21$	$\phi^2 = 0.1912$ $C = 0.41$	$\phi^2 = 0.4735$ $C = 0.57$

ϕ が大きいほど、或は C が 1 に近づくほど型式による岩石撰擇の度合は著しいことになる。この式に依て求められた數値を一括すれば、上表の如し。

この表によつて見らるゝ通り、 ϕ 或は C は三地方とも打製石鏃より磨製石斧の方が大きい。その開きは信濃に於て強く關東に於て弱い。注意すべきは、信濃・北關東・南關東と、山地より低地に向ふに従ひ一般に、 ϕ 或は C の増大する現象である。

註四 Biometrika, vol III, P. 182

駿豆相交界地方の聚落に對する歴史地理的考察(豫報)(二)

耕 崎 正 男

五、聚落の生立

聚落の生立は主として自然人文の兩面に其の

基礎を置いてゐるから、種々の要素が織り込まれてゐるもので之を簡單に述べ難いが、先づ最

駿豆相交界地方の聚落に對する歴史地的考察

も著しい事實として、交通聚落を擧げねばならぬ。先づ前述の濱街道の街村は沼津から東方三島に斷續し更に箱根八里の官路を見れば、三島から錦田村に差懸り松並樹の間を縫ふて外輪山を登ると、塚原新田、市ノ山新田、三ッ谷新田、俣原新田、山中新田と、新田なる名稱を附した聚落が整列してゐる。これ主として箱根路が官路となつてから新たに移住し來つたもので、中には故郷の名稱を冠してゐるものもある。彼の舊道の元山中から水飲附近へ移住して山中新田と稱する如きは夫である。

箱根町は元和三年家康の遺命により同四年に關所の設置されると同時に箱根宿として開かれたものである。即ち夫以前に於ては現在の聚落の西端なる字蘆川町に四、五戸の農家のあるのみであつたらしいが、關所設置の際小田原の石内太郎左衛門宗賢が命を受けて本陣となり、小田原の町民を伴ふて移住したのである。之現在の箱根町大字小田原町の起源である。町の西部

の大部分は三島の町民を移住せしめたに起因するもので、現在の大字三島町が之である。此の小田原、三島の町界は郵便局(舊本陣石内九吉郎氏經營)附近である。關所は固より小田原藩主の預りで大字小田原町に在つた。關所の東側には字新谷町も出來たのである。元來此の地は政治的要素を十二分に含んでゐるが本を質せば交通に歸着する。更に權現坂を登り須雲川の谷に向ふと笈平の醴(甘酒)茶屋で、全く旅客相手の名稱である。愈々須雲川の谷に出ると畑宿である。名を聞くだに交通聚落で、純然たる禪町を爲し小田原箱根間の間の宿(大名の休息所は金刺久平氏宅より西(三軒目))として榮えたもので、民家の内部を一見しても普通農家とは大いに趣を異にしてゐる。更に下れば須雲川がある。之も禪形の交通聚落で、眞偽はいざ知らず國民文學に其の名を得た壁勝五郎初花夫妻の墓も此の地の鎖雲寺にある。更に下れば湯本茶屋(二名臺ノ茶屋)これも交通聚落として生立ち、畑宿と共に間の宿とし

て繁昌したのである。

次に裏街道を見るに、仙石原も箱根裏街道の關所の所在地で政治的意味を含んでをり、産業要素も加はつては居るが半ばは交通聚落、娼ヶ茶屋は乙女峠に登らんとする所、又下つて來た處である。足柄路の關本は延喜の昔の坂本驛の一部で之も起原は交通聚落である。近時鐵道・軌道の開通で驛前に聚落を生じたものは相當あるけれども多くは在來の聚落が驛前に延びたものであるが、茲に特筆せんとするのは駿豆電鐵の終點たる修善寺驛前である。此處は北狩野村柏久保の稻田であつたものが終端驛となつて近時狩野川上流に於ける交通の要として、奥伊豆の咽喉を扼する地點となつて新らしく氣を吐きつゝある交通聚落である。

殆ど政治的意味から城下町として生立つたのが韮山中學校附近であるが、今は城下町としての面影を偲ぶに足らない。併しながら城址の東は江川氏の祖先宇野太郎親信が移住した際十三

名の家の子郎黨が各一家を構へたるに起因し其の後江川氏が代官として明治に至つたので、今では元の城下町の東部に位して江川家の門前町たるかの如き觀を呈した金谷區がある。

政治と交通とを要素とする純粹のものとしては、先づ第一に前記の箱根を推し之に小田原、沼津を加へ更に松田を加ふべきであらう。尤も松田は交通のみならず酒匂地溝に臨み經濟的意味が深かつたであらうが、秦野盆地の西門を扼する地點であり、賴朝の弟の朝長の松田亭があり、其の死後平家全盛の世には大庭景親が平家の爲に改造したと云ふ。其の後松田氏が茲に居り北條早雲に款を通じて老臣となり、此の地を總領に傳へた、即ち松田總領之である。されば此地は交通のみならず政治的要素が濃厚である。小田原は既に鎌倉時代から其の名はあつたが十六夜日記の作者が前の如く二十八日の未明に伊豆の國府を出て箱根を越えた記事に、

「湯坂より浦に出て日暮れかゝるに、猶とまらべき所遠し

伊豆の大島まで見渡さるゝ海づらを、いづことかと問へど知りたる人もなし。海人の家のみぞある。海人のすむその里の名もしら浪の、よする渚に宿やからまし。鞠子川といふ川を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ處にとどまる。

とあつて明かな如く、小田原附近は海士の焚く火に焦される地で旅人の宿るべき處もなく、阿佛尼は暗夜酒匂川を渡つたものであり、室町時代に入つてからも太田道灌の歌に「なるこ弓賤が小田原見渡せば稻葉の末にさわぐ群鳥」とあるを見ればまだその初期には繁華な町ではなかつたが、大森氏の居城地となつて繁昌し殊に北條早雲が爰に居を構へて坂東に號令するに及んで著しく文化の向上を來し、其の後小田原の文明は江戸へ移つたとは云へ徳川時代に入つてからも城下町であり、且箱根路が官路となつてから益々繁榮を來した。沼津も亦交通と政治で生立つた、と云ふのは一部は鎌倉時代からの東西の要路で東北部なる三板橋の邊は車返とて史上に知られた處、又一部は沼津城——古くは三板橋

城、天正七年武田の部將の築くところ——の城下町であり、河に沿へる城南の沼津聚落は其の名の示す如く水運の津であり、こゝが中心として發達し北進して徳川時代の要驛となつた。

産業聚落の最初のものとしては殆ど農村漁村である。耕地を餘さざる海岸の聚落は漁村の尤なるもので、眞鶴灣内の聚落の如きは蓋し其の典型的のものであり、西岸の靜浦村の聚落も江の浦にせよ獅子濱にせよ何れも漁業で生立つた。往昔のマーケットに生立つたのが葦山の四日町と三島の二日町である。前者は北條の市場であつた。恐らく四の日に市の立つた名残の名稱であらう。其の隆盛は此の地に興つた北條時政以後であるらしい。二日町は往昔菅笠を造る人家の點在した處で、笠縫の里と稱した。其の後此の附近なる大松原で毎月二日に市を開いて繁昌した。故に二日市場と稱したのである。此の事は慶長初年に止んだらしいが名稱は依然として今日に及ぶもので、三島大社の前方即ち下

田街道の起點附近が夫である。工場聚落の尤なるものは小山で、之亦典型と云ひ得るであらう。

愛鷹山麓面地方は先史原史の時代を通じて居住に適當な地點として選ばれ恐らく引續いて半農半漁の聚落が低位置に出來、地形の變化に伴ふて純農となり産物の増加と共に戸數を増し山麓線に沿ふて見事な形態を有するに至つた。それと同時に砂丘帶に漁業者の移住があつて先づ散村を作り、地形の變化と共に農業と相俟つて人口を増し、鎌倉時代以後交通聚落を形成し加ふるに東海道の要となり、尙且近時東海道線の開通によつて保養地として益々發展するに至つたのである。即ち先づ北方山地の下腹面に沿うて聚落を生じ、續いて下降し次いで南方の砂丘帶に産業と交通及び氣候を要素とする聚落が生立つた。

溫泉聚落として長岡は實に典型である。即ち明治四十一年頃初めて溫泉を得た當時には僅かに一二の農家のあるのみであつたが今日の盛大

を來たし、駿豆電鐵をして古奈溫泉に近い南條驛を今や「伊豆長岡」と改稱せしめるに至つた。

長岡の得意や蓋し想ふべしである。畑毛も亦大仙山の麓は溫泉に生立つた。熱海の如きは景色と氣候の要素が加はつて居りはするものの溫泉聚落で、鎌倉時代から既に開けて遂に今日の盛大を爲すに至つたもので、その間歇泉は人目を惹くものであつた。箱根火山内の聚落は箱根、元箱根、畑宿、須雲川、仙石原等の特殊の地方を除いては蘆ノ湯、宮ノ下にせよ、底倉、塔ノ澤にせよ、堂ヶ島にせよ殆ど全部溫泉聚落で一種異様な別天地である。

宗教的聚落としては好例に乏しいが南足柄村の最乗寺道了堂のグループが蓋し之で俗塵を抜いた別天地である。此の寺は曹洞宗の巨刹で大雄山最乗寺と云ひ、應永元年の開基と傳へらる。從つて人家はそれ以後に建てられた。次は菰山の寺家である。此の地は文治五年六月源賴朝が願成就院を建立したに初まるもので寺院の門前

町である。併し此附近は北條の地で前北條や堀越公方との關係もなきにあらずである。神社聚落としては先づ元箱根で、此の聚落は箱根權現（今國幣小社箱根神社）の鳥居本町として生立つた。

建立の年次は詳かでないが本地垂迹説が發展した後、天平寶字元年に萬卷上人が來て奉齋するに及んで繁昌することになり、源賴朝が石橋山に破れた當時、當社の別當に援けられて以來源家信仰の的となりそれ以後益々繁昌することになった。併し往昔は多少交通聚落の役割も加はつてはゐたらしいが、箱根路が鷹巢山を經やうが官路が須雲川の谷に曲げられ直隣に箱根宿が開かれても、神社聚落として殆ど影響のないものであつた。殊に關所附近一帯の地を御要害山として最も嚴しく取締つた徳川時代に於ても此の地域は權現領としてあらゆる政治の圏外に超越して明治に至つたもので全く好箇の神社町である。自治制を敷かれた今日に於ても箱根、元箱根、蘆ノ湯の小三ヶ町村が合併するに至らず、

漸く組合役場を設け、小學校亦近時漸く組合となつた如きは全く成立の起源と歴史と職能を異にするによるものである。

三島は二日町こそ往昔の市場に生立ちはしたが、交通政治宗教を主なる要素として發達した即ち町が東西に長く且南北に腕を出して居るのは、往昔から既に多少は東西の交通路に當つて居り、殊に近世の要路であり、且又南北の交通にも關係してゐた交通聚落たることを示して居るものである。又古くから國府の地となり國分寺國分尼寺が建てられ三島神社が建立せられた點に發達の起源を有する。政治上よりしては單に往昔國府の地たりしのみならず、徳川時代に入つてもその初世より寶暦年間迄代官陣屋があり、其の後陣屋を韮山に移して後も出張所を此の地に置いてゐた。即ち發達の要素を多分に有してゐるが元を正せば地理的位置の良好に歸着する。又文化の一中心として爰に特に留意すべきは大社の東側なる宮町即ち元の社家村に厩御こまみ

門(かき)(現今は小御門(こみかど))なる地名の存在と、其處に亦曆の祖神岩永姫命を祀る加茂神社 河合家の後庭にあつたが今は東北に遷座し他と合祀してある)の存在することである。併もこゝには最近まで天文臺があつた。其の起源は第四十九代光仁天皇の寶龜年間(たからかめ)に曆師とし河合家が京都より移つたもので爾來觀測を司り明治十七、八年頃まで三島曆を頒分したことをである。

「因に云ふ河合龍節の出した「明治二年三島曆」(清水吉彦氏所藏)は定價壹匁五分であつた。龍節の長男當主河合眞治氏は伊豆銀行員である」

溫泉と宗教とを要素として生立つたのは修善寺と伊豆山である。修善寺は延暦十七年に桂谷に弘法大師(くわふだうし)(實はその弟子杲隣とも云ふ)が眞言の道場を開いたに始まるもので今の地名は其の寺號から起つた。寺は勿論眞言宗であつたが後禪宗に改まり修善寺と云ふやうになつた。角閃安山岩の列嶺から湧出する獨鈷(どこ)の湯は弘法大師が寺前の桂川を獨鈷で穿つたに因むと云ふ。斯くて鎌倉時代に入つて繁昌すると共に又幾多の悲劇を

生んで今に其の面影を留めては居るが、兎も角今日の繁榮を來たすに至つたものである。伊豆山は伊豆山權現(いずさんけんげん)(今國幣小社伊豆山神社)と溫泉を要素として居るが、火神系で延喜式神名帳に伊豆國田方郡火牟須比命神社とあるもので、往昔氏は神孫と云はれ眞に氏の神と氏の子との關係にあるものとされてゐたものであり又溫泉も明治三十年まで神社の所有であつたが、蓋し溫泉神社で、本を質せば溫泉聚落ともなるが鎌倉殿の尊信が厚く政子の如きは屢々參拜したと云ふ。この神は箱根權現と共に二所權現と云ひ參拜も多く今日の盛大を來たした。即ち此の地も附近の溫泉と同じく鎌倉時代以後の發達である。

御殿場附近は先史時代から住民のあつた處で一部は交通聚落の役割を演じてゐたが其の地名の起源に就いて或は賴朝の富士の卷狩に起因すと云ひ、又吉田博士は其の著大日本地名辭書に於て「舊名杉中村と云へるを元和三年幕府久能

山より東照公の遺骸を日光へ移送せしむる時、此處に假營を建て俗稱御殿場と云へるより地名となつた」と云はれてゐるが、又御殿場町役場自らの研究では元和元年に徳川公が當地に假御殿を新築せられたことがある。以來杉中村を改稱して御殿場村と稱した。又當地方は往昔御食米を納めたことがあるので御厨郷と稱したが維新以來自然其の名稱は消滅した。然れども當町は御厨郷の中央に位するを以て其の緣故を引き御厨町と稱した。それを大正三年に至り御殿場町と改稱したと云ふのである。何れが眞なりや他日の研究に待つ。又こゝに注意すべきは御殿場町の亞米利加村である。明治三十年にアメリカの宣教師によつて別莊地として撰まれたのである。これ蓋し箱根の裾野に位し富士の秀峰を臨み俗塵を抜き且夏季氣候の冷涼なるによるものであらう。

六、政治及び交通系統の變遷と

聚落の消長

關ヶ原合戦の間際に近江長濱の田中孫作が京都から小山迄走つたことには氣付かず、僅か二十哩のマラ톤のみを知る如く、多くの識者が交通系統の變遷と聚落の盛衰を論ずる際地中海沿岸の諸都市を例に引くが「道は近きに在り」とは此の場合にも當嵌まる。この地方は小規模でこそあれ多くの變遷を繰返して居るもので従つて聚落の盛衰消長は之に伴ふて大である。

往昔は足柄路が公道であつて産業要素と相俟つて御殿場、竹ノ下、矢倉澤、關本が榮え、後に南北兩道を通ることになり更に徳川時代に入つて箱根路が官路となつてから夫が衰へたのみならず西箱根舊道の聚落が元山中を始め衰へ壹町田や本宿も其の影響を受けたと思はれるが、箱根町の如きは元和四年新たに箱根宿として建設されたもので、徳川中世には二百四十戸（石内九吉郎氏による）もあり、醴茶屋の如きも定住人家の外に出店が出来、畑宿も亦交通線路が開かれた爲に發達したもので假本陣さへあり間の宿で

ありながら宿名さへも附せられ、須雲川も亦思
恵を蒙り水飲附近が發達して山中新田となり、
僅に三戸の農家或は茶屋のあつた三ツ家が發達
して三谷新田となり、雨水の爲に交通不便で篠
を敷いて僅にその便をはかつた即ち篠原が發展
して笹原新田となつた。市ノ山新田は箱根路が
官路となつてから人家が軒を並べて市を爲すに
至つた爲に市ノ山と云ふやうになつたと云はれ
又三島宿から第一番目の山の意であるとも云は
れてゐるが發達は兎に角參勤交代以後のことと
ある。又荒塚多き初音が繁昌して塚原新田とな
つた。加之小田原も三島も大いに繁華に趣いた
のである。

然るに明治維新と同時に大打撃を受けたのは
各宿であり、併も其の先登に立つものは本陣で
あつた。殊に臺ノ茶屋の如きは維新の兵燹にさ
へかゝつたのである。加ふるに明治十九年東海
道線の開通は又しても大變動を與へた。即ち小
田原、箱根、三島の十戸に餘る本陣中、歴然と

留まるは只箱根の石内九吉郎氏と三島町小中島
の樋口傳左衛門氏あるのみとなつた。他方には
御殿場が大いに復活し亞米利加村さへも出來た
ので附近に睡る先史原史の民族も大いに満足し
小山の工場聚落は全く東海道線の生んだ産物に
外ならぬ。斯る一方に於て箱根路の聚落が小田
原を始め著しく衰へ、須雲川の如きも全く寒村
となり、只人家が街道の兩側に平行して禪町の
形狀を發揮し僅に過去の交通聚落たるを示すに
留まり、辛うじて勝五郎と初花に其の地名を聯
想せしめるのみとなり、其の上流雜木小屋の野
立所(小學校の側)の如き最早跡形もなく、畑宿は
維新當時四十二戸(昭和三年十二月、八十八歳の金刺久
平氏による)もあり、實に街道の要衝であつた。

臺ノ茶屋や元箱根の如く戰亂の巷とはなりはし
なかつたが、王政維新と東海道線の開通とは此
の地を顧みず今や三十戸(金刺氏による)となり、
ハンザキに僅に其の名を留むるのみ。其の西方
檜木平の野立所の如き探ぐるに跡なく、笈平の

醴茶屋は篠の中なる僅に一戸の賤が伏屋に其面影を留むるのみとなつた。箱根町は江戸幕府の勢力の反映と見るべきもので、先づ徳川氏によつて建設せられ小田原、三島の兩問屋場を有し日を遂ふて榮へ中世には二百四十戸もあつた。

然るに幕府の勢力の衰微と共に民家は減少し元治元年には百六十戸（石内氏による）となつた。而して内百戸は旅籠であり、中に本陣五軒脇本陣二軒あつた。即ち戸數の六割二分五厘は旅籠であつた。政治的要素を有するとは云へ如何にも交通聚落の特色を發揮してゐたのである。關所の廢止と東海道線の開通と相俟つて明治三十年代には人口は減少したけれども、まだ七百五十（吉田東伍氏地名辭書）もあつたが、漸減を續けて最近に及んだのである。徳川時代には旅館が多く従つて下女下男も相當居たであらうが今一戸平均七人と假定すれば、次の如き經路が表はれて来る。

徳川中世

一六八〇名

元治元年	一一二〇名
明治三十年代	七五〇名
大正七年末	五九二名
大正九年十月一日	五〇八名
大正十四年十月一日	四八三名
昭和五年十月一日	五三七名

である。關址の東側なる新谷町の如きは立場を兼ねた茶屋が十八軒もあつたらしい。それが減少したけれども未だ六戸の人家があつたが離宮の敷地となつて、今は全部なくなつた。聖代の餘澤とは云へ、消滅した事は事實である。而して又各新田の如き何れも淋しい畑作の寒村と變り果てた。

然るに今日自動車の開通となつて大分活氣を帯びて來たのである——（但しどこまでも氣の毒なのは須雲川の舊街道筋である）——併しながら活氣を呈したとして直ちに人口の増加した譯ではなかつた。關東大地震の災害は固より顧慮しなければならぬが二度の國勢調査の結果に徴して見ても減少を

示してゐた。自動車道を生命として徳川時代以前の狀態に復活した筈の蘆ノ湯村の如きは景氣の影響も大いにあるとは云へ大正九年に百三十七人をつたものが大正十四年には八十三人に減少してゐる(但し戸數に増減はない)。併し元箱根、箱根の如き避暑客は確に増加して活氣を帶びて來たことは争ふ餘地がない。此の頃は修學旅行も段々多くなりつゝある。即ち元箱根は大正九年以來、三八九人、四〇二人、五三二人と増加し、箱根、蘆ノ湯も亦漸く返り咲の徵を示したのである。此の時に當つて北伊豆大地震は湖岸沖積地殊に箱根を全滅に瀕せしめたのであつた。自動車の開通で面白い現象は聚落の衰微である。特に取立て云ふ程のものでもないが嫉ヶ茶屋の如きは自動車の開通と共に乙女峠を越す人が殆どなくなつたので、最早旅客相手の商業のみでは立つて行かれないやうになつた。但しゴルフ場は出來たのである。

擬現在御殿場が繁昌してゐるが熱海線開通の

曉亦想ふべしである。小田原が復活し熱海、伊豆山、湯河原が繁昌疑なく、三島は軍隊を合すれば大正九年以來一五・七一五人、二〇・四二九人、二二・七八二人、と隆々増加を示してゐるが更に驛が町の北部に出來るので之亦四通八達——汽車電車自動車——の要路として益々繁榮に赴き市制施行も近きにあらう。三島は口野に築港し沼津の繁華を奪はんと活躍してゐるらしいが又實際奪ひ得るかも知れぬ。中郷村大場附近は北伊豆地震の大災を受けたとは云へ、下田街道から熱田街道の岐れる處で又畑毛溫泉場の入口として、將又駿豆電鐵の要驛として且又丹那トンネル工事に對して必要缺くべからざる處であるが、トンネル完成の曉には熱海に往復する自動車も大いに減じ、大竹との交渉は全く用済に付き解雇と云つた形となり三島の發達に伴ふて文明を汲收せられ單に一箇の田園聚落たるの運命をたどるのではなからうか。交通系統が如何に變化しやうが差したる影響もなく交通聚落の役

割を演じて來、尙將來も依然として續けんとするものは國府津である。

七、聚落の分布

茲まで計算の歩を進めて來たが最後の答は次の通りである。

自然的條件は人類の分布を決定する主因であるが住民の分布は聚落の分布を概觀することによつて其の要領を得ることが出来るのである。

今昭和五年國勢調査の結果を五萬分の一地形圖に照して之を通覽するに、斯くの如く殆ど山岳を以て満たされた地域に於てすら、其の人口の約七割は一〇〇米未滿の低地に居を占め併も主要部は五〇米未滿の地域であり、約一割は一〇〇乃至三〇〇米の間に在り、残る二割は夫以上の地點である。併し高地に於ける分布に就いては小山と御殿場、箱根地方が最も重要な役割を演じて居る。又百米以上の地域に於ける狀況に就いて見るに、溫泉等の特殊條件を有せざる限り、垂直變化の緩慢なる處に限られて居るのを

見る。之に依つて觀ても人類の活動には土地の高度は大なる條件でなく、主として垂直變化の問題に懸ることが如實に示されて居る。

分布を水平的に眺むれば狩野川沿岸一帯と酒匂川の地溝帶に多く、兩者の間には少く、駿河灣岸と愛鷹山麓に整然と列なり、其の間には全く缺除し、又黄瀬川の溪谷に多いのは勿論である。東西の文化地域の境界帶に於て多くの聚落を有するものは箱根のアトリオと丹那地裂帶とである。箱根に於てはアトリオの平地と畑宿を除いては凡て溫泉聚落であるのは云ふまでない。地裂帶に於ては先づ田代盆地の南部に位する田代で、狭小な田地の南縁に位してゐるは經濟と衛生とに起因してゐるであらう。南方丹那とを連ね又東西の文化地域の媒介者の位置にあるのが輕井澤である。丹那の諸部落は必ず古代文化の遺跡地の下段に位し併も必ず山麓にあつて盆地底の田地を包圍してゐる。之亦經濟と衛生に即した分布であらう。浮橋も亦然りて、

五六戸の例外を除いては皆山麓にある。此の盆地底の大部分は極めて低濕で粘土と泥土極めて深く建築不可能である。斯くして出來た山麓の殊に整然たる聚落を形成してゐるのは西南山麓で、併もそれは見事斷層崖に位置を占めてゐるのである。何と恐しい事ではあるまいか。果せるかな昭和五年十一月箱根の湖岸沖積地と共に輕井澤にも勝り斷層崖上の聚落が大打撃を被つたのは此斷層線の活動が甚だしかつたによるもので、富士大島の火山構造線の活動や加殿構造線の活動を想像する必要はないと思ふ。要するに活斷層上に居を占めたのが甚大被害の最大原因であつた。此の斷層帯は南方田原野を經由して南走してゐるから此の線上に當る聚落が同地に於ても災害を被つたことは云ふまでもない。併し田原野に於ては聚落が平野の中にも存在するのは耕作地を犠牲にするとも衛生状態は左程悪からざるによるであらう。

酒勾地溝の聚落は大體綿密に分布してゐるが

それでも東北側の斷層崖下に多いのである。尙是等の聚落を職能上から、又形態上及び地形上から分布を考察することも必要且面白いのであるが、職能上からの分類や分布は經濟状態を述べた後にあらざれば多少本末轉倒の嫌があり、形態上地形上の分類竝に分布は地形圖によつて略観ひ得るから割愛することにした。

八、現代の聚落と古代文化の遺跡との關係

現在の聚落の位置を古代の遺跡と對稱するに當り東北側に就いては筆者の足跡甚だ疎で僅に關本附近に手懸のある外多くの事實を掴み得ないので充分な比較は出來ないけれども大體は視ひ得るのである。概括的に云ふならば古代文化の遺跡地と現代の聚落の位置とは大體一致してゐるのである。即ち狩野川、黄瀬川の中流以下の近邊、富士愛鷹の山麓が之であり、東岸にも海岸近くに其の一致を見るのである。

然るに今少しく個別的に觀察する時、又不一

致を見るのである。即ち愛鷹の南麓にしても古代の遺跡は海拔百米内外の高度に多いのに、現代の聚落は、柳澤の如き例外を除いては悉く五十米未満であること、併も未だ遺跡の發見されざる沙丘帯に著しく街村の發達してゐること之である。而してこの街村たるや主として鎌倉時代以後に生じたものであるが自然増加と云ふよりも寧ろ北方山麓からの移住によつたもので、移住が又主として徳川時代で今に多く其の口碑が傳はつて居り、佛教各派の分布を見て旦那寺が北方の山麓に在つて南北の連鎖となつてゐるのでも判る。而して現今に於ても神社と寺院は現代の聚落よりも比較的に高處に在るが、元々寺院は現在よりも概して高位置にあつたらしく今に其の遺跡を留めてゐるものがある。概観すれば古代文化は山腹の下面に榮え、それが軀て山麓に下り、百米線附近に在つた舊道が又山麓に下り、寺院も亦多少下降し、更に地形の進展と共に片濱、原町の地に聚落發生の曙光を見、

爰に濱街道の發達を見るに及んで交通聚落を生じたもので、一括すれば山腹約百米の地域に先づ古代の文化の發祥を見、軀て文化の進歩に伴ふて山麓に下り更に南方海岸に進出したもので古代の文化は全く化石として山腹に埋没し、近世の文化は山麓に純農として化石せんとし、南方は多くの別莊を持ち農家と雖も果樹園に包まれ文化の尖端を走つてゐるのを見る。

土狩本宿附近一帯に於て大なる移動が見受けられないのは主として地形變遷のないのを物語ると同時に居住地が文明の進歩に對して順應性を持つてゐる爲であらう。さるにして黄瀬川は最下流に於て古來河道を變じたもので沼津の方面に流れた時代もあつたらしく、小規模な變動はしばしばあつたらしい。彼の黄瀬川宿の如きも川の左岸にあつたと云ふのに今其の地點的確でないのは河道の東遷の爲に亡びたものであらう。尙其の上流南小林に於ては安政元年大地震の際約二町歩の陷落を來たし民家十一軒（大岡

村役場には九戸と云ひ清水氏は十戸と云ふは地下三丈餘陷没し、爲に部落の一部は消失したのである。

更に三島附近から東南一帯を見ても現在の聚落は殆ど全部古代遺蹟の下位に位置を占めてゐるのである。之蓋し古代狩野川下流が低地を濫流し又熔岩流の末端から伏流の噴出するものがあつて古代の民族が未だ低地に安住し得なかつた状態を思はしめるものであると同時に、其の後地形の進展と文化の進歩との總和で低地に下つた事を物語るのである。遙か南方の田京附近にしても多少は古代遺跡に比して下位に在るのである。香貫、徳倉、前鷺頭等の小火山地方を見るに長岡の若宮塚(長岡小學校々庭)や下徳倉の一部の如き例外はあるとしても遺跡は概して高位に在るのである。

同西岸の三津附近には相當遺跡の存するのに現代の聚落が夫に比して尠少なものは、地域が狭小で生産力の豊富ならざる爲に轉住のあつたことを物語るものであり、西南戸田村井田にも多く

の古墳あるにもかゝらず現在聚落の勤いのもの亦經濟空間の狭小な爲轉出のあつたものと見える。東海岸に於ても多少此の傾向は認められると思ふ。酒勾地溝帯に於ても關本附近を初め山の手より發祥し文運の進歩治水工事の發達と共に沿岸に進出したであらう。

通覽するに古代文化の遺跡が概して高位位置に在るのは、一には地形變化の若干を物語るも、他面には石器時代人類が原始收得經濟に留まつたものでり、金石併用時代に入つても高度收得經濟の階梯に在り更に進んだものと雖も低級ハック耕の域を脱し得なかつたものと思はれる。従つて耕作すべき稻田の必要もなかつたものであり、料理法又簡單で現代人の如く多くの飲料水をも必要としなかつたと思はれる。然るに文化の進歩に伴れて高度ハック耕が行はれる程度に及んで初めて低地に下つたものと思はれる。而して今日の開耕に到達したものである。然るに該地域に於ては最早水利のある限り餘す

處なく利用し盡されて、極度の集約經濟となり人口密度又丹那、輕井澤、田代の如き全く包和の狀態に在り純農を以ては生計を立つる能はざる程度に至り酪農化したのである。

擬遠き祖先は比較的緩傾斜な山地の下腹面に居を占めて採集經濟に甘んじたものが低地に下つて集約經濟に達し更に山地の開墾に着手し先

住民或は祖先の墓をも發く(多くは無意識的に)狀態に立到つたものである。今後浮島原の乾拓事業の完成と共に多少は聚落の移動を見るであらう。而して箱根舊官路の聚落は二百年の昔に低地から登つたもので維新と交通系統の變遷で明治以後概して下り坂となつた。(完)

世界油田の現状と石油工業 (二)

近 藤 堅 二 譯

第二編 世界に於ける油田(第三圖參照)

國際外交の裏面に秘められて居る時潮に就いて關心を置く人士ならば、今や石油が實に國家政策と國際關係を支配する原動力とまでになつたことを認めるだらう。

石油製品の軍事上の價值と石油用途の擴張に依る石炭貿易の不振と相俟ち、之に刺激され英

國は世界油田に於ける己が地歩の強化を畫し、その軍事、貿易上の鞏固を企てるに至つた。他の列強もこの趨勢に率ゐられたが、特に世界總產油の70%を消費し石油需要の益々増加する合衆國は、自國內の油田の產額を以て無限に之に應じ得なくなつた。

従つて、露西亞、波斯、樺太、墨西哥、南米